Asian Journal of

HUMAN SERVICES

Printed 2012.0430 ISSN2186-3350
Published by Asian Society of Human Services

April 2012
VOL. 2

Asian Society of Human Services

Human Services

Asian Journal of Human Services , VOL.2 144-155

ORIGINAL ARTICLE 11

特別支援教育に携わる教師のメンタルヘルスとストレス要因の関連

-教員に対するメンタルヘルスチェックの分析結果から-

Relationship between Teacher Mental Health that Involved in Special Needs Education and Stressor
- From the Analysis of Mental Health Check for Teachers-

森　浩平 [1)]（Kohei MORI）　，　田中　敦士 [2)]（Atsushi TANAKA）

1)　琉球大学大学院教育学研究科

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原１　琉球大学教育学部特別支援教育講座

ktv_m_kohei@yahoo.co.jp

2)　琉球大学教育学部

atanaka@edu.u-ryukyu.ac.jp

ABSTRACT

本研究では、特別支援教育に携わる教員のメンタルヘルスとストレス要因の関連について明らかにし、教師のストレス低減の方法を検討することを目的とする。特別支援学校教諭免許状を未取得で特別支援教育に携わる教員に対するメンタルヘルスチェックの結果から、自身の教師としての専門性が低いと感じている教員は、他人からの評価を懸念することでメンタルヘルスへ悪影響を与えていることが明らかとなった。人間関係の構築が特別支援教育に携わる教師にとって重要な課題となっている。

The purpose of this research is to disclose the teacher mental health of special needs education relating to stressor and finding a way to reduce their stress. From the analysis result of mental health check of teachers that engaged in special needs education, it shows that the group with low expertise tends to fall into evaluation apprehension. Construction of human relations is an important problem to teachers that engaged in special needs education.

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

＜Key-words＞
ストレッサー，　教師，　特別支援教育，　メンタルヘルス
stressor, teacher, special needs education, mental health

Asian J Human Services, 2012, 2:144-155. © 2012 Asian Society of Human Services

Ⅰ. 問題と目的

文部科学省の教育職員に関する統計調査（2010）によると、全国の公立小・中・高校、特別支援学校などの教員約 92 万人のうち、病気休職者が 8627 名、精神疾患による休職者は 5458 名で、休職者の約 63%が精神疾患という事態に陥っている。また、うつ病の症状を訴える教員の割合は、一般企業の労働者の約 2.5 倍にのぼる。精神疾患に陥る教員は年々増え続け、教員のストレスは増加の一途を辿っている。

ストレスという言葉はもともと「圧力」、「圧迫」などを意味し、物理学や工学の分野で用いられていた。現在用いられるようになったストレスという言葉は、カナダの生理学者ハンス・セリエ（Hance Selye）が医学の分野において、「外界のあらゆる欲求によってもたらされる身体の非特異的反応」を意味する概念として 1930 年代に提唱したことに始まる。セリエによれば、騒音・異臭・精神緊張などの生体に有害な異常刺激は、生体に特異的な生理学的変化（副腎皮質の肥大、胸腺・膵臓・リンパ節の委縮、胃と十二指腸の出血や胃潰瘍等）を引き起こす。このように、ストレッサー（異常刺激）によって引き起こされた変化を汎適応症候群とよび、ストレスとはそのような反応が生じている状態を指す。

石川・中野（2001）が小・中学校・高等学校に所属する教員を対象におこなった調査では、日常の仕事の中でストレスを「非常に感じる」あるいは「感じる」と答えた教員が半数以上を超えている。このような調査から、子どもの成長を支える教員たちが、今、自分自身の危機に曝されていると言える（田上・山本・田中，2004）。かつて国際労働機関（ILO）が指摘したように「教員たちは戦場並みのストレスに晒されている」と言っても過言ではない（赤岡・谷口，2009）。

このような深刻な状況の中にあり、多くの教員のストレス改善のための研究が増え、教員のバーンアウト（燃え尽き症候群）に目を向けようといった動きが強まっている。こうした中で提唱された「教員バーンアウト」は特に教員に限定した概念で、「教員が、理想を抱き真面目に仕事に専心する中で、学校のさまざまなストレスに晒された結果、自分でも気づかぬうちに消耗し極度の疲弊をきたすに到った状態」と定義されている（田上・山本・田中, 2004）。

教員のストレスの要因を高木・田中（2003）は職務自体・職場環境・個人的（家庭内）の 3 つの要因が影響しており、バーンアウトとの関連性があることを指摘している。このうち職場環境の影響によるストレッサーに関しては、役割葛藤・同僚との関係・組織風土・評価懸念の 4 因子 25 項目に分類がされている。

教職員の勤務の実態や意識に関する分析委員会（2008）が、沖縄県の公立小・中・高校、特別支援学校に在籍する本務職員 12,760 人を対象にした調査を実施した。その結果、「日頃、悩んでいること」について、「特になし」（29.4%）が最も多く、次いで「教員としての適性」（24.4%）、「子育て」（9.8%）、「自分の病気」（6.7%）の順であった。「教員としての適性」に悩んでいる教員の割合が約 4 分の 1 を占め、他の悩みに比べて特に多い結果となっている。

UNESCO(1966）による「教員の地位に関する勧告」では、教員の仕事を専門職として定義し、「厳しい継続的な研究を経て獲得される専門的知識及び特別な技術を要求する公共的業務」と規定している。障害児教育教員の「専門性」は、複雑な教育的ニーズを抱えた障害児

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

の増加を踏まえ、通常教育教員との専門性の差異は量的な差異とともに質的な差異も包含している（清水，2003）。

特殊教育から特別支援教育へと大きな転換が図られ、障害種の拡大や重度・重複化に伴う一人一人のニーズに応じた適切な指導・支援の要求水準の引き上げや、学校と福祉・医療・保健・労働機関等との連携など特別支援教育を担う教員に求められる専門性は非常に高まっている。こうした現状の中で特別支援教育に携わる教員のストレスも飛躍的に高まり、問題も年々深刻化している。

そこで本稿では、特別支援教育に携わる教員のメンタルヘルスについて、男女差、教職経験年数との関連について分析を行う。また、具体的なストレス要因を教師の専門性の観点から分析し、教員のメンタルヘルスの現状を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 方法

１．調査対象

特別支援学校教諭免許状未所得で、障害児の指導を担当している教員 103 名を対象に質問紙調査を実施した。

２．手続き

2009 年 8 月 5 日の沖縄県教育職員免許法認定講習の休憩時において、調査の趣旨説明を行いプライバシーの配慮をしたうえで調査票を 103 名へ配布、同日中に 94 名から回収を行った。

３．調査内容

質問紙調査の内容は以下の通りである。

（1）フェイスシート

回答者の基本属性

・年齢

・性別

・教職経験年数

フェイスシートでは、回答者の基本属性として性別・年齢・教職経験年数についてたずね、それぞれにおいてバーンアウトにどのように関連しているのかを明らかにした。

（2）教師としての専門性・特別支援教育教師としての専門性の自覚度

適当な尺度がなかったため尺度などは使用せず、「教師としての専門性をどの程度身につけていると思いますか？」「特別支援教育についての専門性をどの程度身につけていると思いますか？」の各１項目で専門性についてたずね、「１．ほとんど身についていない」「２．あまり身についていない」「３．どちらともいえない」「４．やや身についている」「５．よく身についている」の５件法で回答し、それぞれ専門性がバーンアウトにどのように関連しているのかを明らかにした。

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

（3）ストレッサー尺度

高木・田中(2003)の先行研究で使用されたストレッサー尺度を用いる。鈴木・別惣・岡東(1994)の役割曖昧性・役割葛藤尺度、橋本(1997)の対人ストレスイベント尺度、牧(1999)の学校経営診断マニュアルから構成されており、それぞれ信頼性・妥当性ともに確認されている。本尺度は、「役割葛藤」「同僚との関係」「組織風土」「評価懸念」の 4 因子、25 項目から成り、「1. 全くそうでない」「2. そうでない」「3. そうである」「4. とてもそうである」の４件法で回答し、項目の評定値を加算した値が得点となる。

（4）コーピング尺度

今田・上村(2001)の先行研究で使用された対処行動測度を用いる。信頼性・妥当性ともに確認されており、「積極的対処行動」「適応的対処行動」「逃避的対処行動」の３因子から構成されていて、17 項目から成り、「1. はい」「2. いいえ」の 2 件法で回答し、「はい」を 1 点、「いいえ」を 0 点として加算した値を得点とした。

（5）精神健康度 GHQ28（中川・大坊、1985、4 因子、28 項目）

ゴールドバーグ（Goldberg,D.P.）が神経症、心身症を中心とする非器質性、非精神病性の疾患の病状把握、スクリーニング・テストとして 60 項目からなる質問紙を英国で開発した。因子分析の結果をもとに 28 項目版、30 項目版などの短縮版も作成されている。本調査では、GHQ28 項目版を使用する。信頼性・妥当性の吟味がよくなされており、実施・採点の簡便性、判別効率、適用範囲の広さなどから精神科、内科、学校、企業などで広く用いられている。28 項目から成り、4 件法で回答を求め、「0－0－1－1 得点法」で得点化する。精神健康度は、0～28 点の得点で精神健康状態が判断される。精神健康度得点が 0 点に近づくにつれて精神健康状態は良好であり、6 点以上の得点になると、精神健康状態が悪いとされる。さらに、28 点に近づくにつれて神経症者として診断される。

Ⅲ. 結果

１．フェイスシート

（1）回収率

本研究における調査のアンケートの回収数は 103 名中 94 名で、回収率は 91.3%であった。また、欠損値についてはペアごとに除外して分析を行った。

内訳は、男性 27 名（28.7%）、女性 65 名（69.1%）、不明 2 名（2.1%）であった。

（2）回答者の年齢

回答者の年齢については、「35 歳以上 40 歳未満」と回答した人が一番多く、27 名（28.7%）であった。次いで、「40 歳以上 45 歳未満」が 23 名（24.5%）、「30 歳以上 35 歳未満」が 16 名（17.0%）、「45 歳以上 50 歳未満」が 12 名（12.8%）、「50 歳以上 55 歳未満」が 6 名（6.4%）、「25 歳以上 30 歳未満」が 5 名（5.3%）、「55 歳以上」が 2 名（2.1%）、「25 歳未満」が 0 名（0.0%）、不明は 3 名（3.2%）であった。

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

（3）回答者の通算教職経験年数

回答者の通算教職経験年数の平均は 14.7 年（SD 6.6 年）であった。最大は 29 年、最小は 2 年 4 ヵ月であった。

通算教職経験年数が 1 年から 10 年未満の教員を「若手教員群」、10 年以上 20 年未満の教員を「中堅教員群」、20 年以上の教員を「ベテラン教員群」とした結果、「若手教員群」は 25 名（27.5%）、「中堅教員群」は 38 名（41.8%）、「ベテラン教員群」は 28 名（30.8%）となった。

（4）教師としての専門性の到達度

回答者の教師としての専門性の到達度については、「身についている」と回答した人が最も多く、38 名（40.9%）であった。次いで、「どちらともいえない」が 30 名（32.3%）、「あまり身についていない」が 22 名（23.7%）、「よく身についている」が 2 名（2.2%）、「ほとんど身についていない」が 1 名（1.1%）であった。教師としての専門性が「ほとんど／あまり身についていない」と答えた教員は、全体の約 4 分の 1 であった。

回答者の教師としての専門性の到達度にばらつきがあったため、3 つのカテゴリーに分類した。教師としての専門性が「ほとんど／あまり身についていない」と自覚している人を「低専門性群」、「どちらでもない」と自覚している人を「中専門性群」、「やや／よく身についている」と自覚している人を「高専門性群」とした。その結果、「低専門性群」は 23 名（24.7%）、「中専門性群」は 30 名（32.3%）、「高専門性群」は 40 名（43.0%）であった。

（5）特別支援教育教師としての専門性の到達度

回答者の特別支援教育教師としての専門性の到達度については、「あまり身についていない」と回答した人が一番多く、35 名（37.6%）であった。次いで、「ほとんど身についていない」が 24 名（25.8%）、「どちらともいえない」が 17 名（18.3%）、「やや身についている」が 16 名（17.2%）、「よく身についている」が 1 名（1.1%）であった。特別支援教育教師としての専門性が「ほとんど／あまり身についていない」と答えた教員は、全体の約 3 分の 2 であった。

回答者の特別支援教育教師としての専門性の到達度にばらつきがあったため、3 つのカテゴリーに分類した。特別支援教育教師としての専門性が「ほとんど／あまり身についていない」と自覚している人を「低専門性群」、「どちらでもない」と自覚している人を「中専門性群」、「やや／よく身についている」と自覚している人を「高専門性群」とした。その結果、「低専門性群」は 59 名（63.4%）、「中専門性群」は 17 名（18.3%）、「高専門性群」は 17 名（18.3%）であった。

2．ストレッサー尺度

（1）通算教職経験年数の比較

通算教職経験年数の 3 つのグループ「若手教員群」「中堅教員群」「ベテラン教員群」を独立変数、ストレッサーの下位尺度「役割葛藤」「同僚との関係」「組織風土」「評価懸念」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、ストレッサーの 4 つの下位尺度において有意な群間差はみられなかった。

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

（２）教師としての専門性の到達度の比較

教師としての専門性の到達度の３つのグループ「低専門性群」「中専門性群」「高専門性群」を独立変数、ストレッサーの下位尺度「役割葛藤」「同僚との関係」「組織風土」「評価懸念」を従属変数とした分散分析を行った。表１に各下位尺度の群別得点と分散分析の結果を示す。その結果、「評価懸念」において、F(2, 90)=5.83 であり 0.1%水準で有意な群間差がみられ、「低専門性群」＞「高専門性群」という結果が得られた。

表１　３群のストレッサー下位尺度平均点

	n	役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
低専門性群	23	22.22±4.54	12.00±2.81	15.09±2.39	10.57±1.70
中専門性群	30	21.27±3.92	12.40±5.88	14.53±2.83	9.53±2.16
高専門性群	40	23.00±4.10	12.53±3.88	14.43±2.75	8.60±2.50
F		1.49	0.11	0.47	5.83
p		n.s.	n.s.	n.s.	**

** $p<.01$

（３）特別支援教育教師としての専門性の到達度の比較

特別支援教育教師としての３つのグループ「低専門性群」「中専門性群」「高専門性群」を独立変数、ストレッサーの下位尺度「役割葛藤」「同僚との関係」「組織風土」「評価懸念」を従属変数とした分散分析を行った。表２に各下位尺度の群別得点と分散分析の結果を示す。その結果、「評価懸念」において、F(2, 90)=4.70 であり 0.1%水準で有意な群間差がみられ、「低専門性群」＞「高専門性群」という結果が得られた。

表２　３群のストレッサー下位尺度平均点

	n	役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
低専門性群	59	22.27±3.99	12.59±4.66	14.69±2.40	9.83±2.28
中専門性群	17	21.29±4.86	11.06±3.63	14.59±3.68	9.29±2.39
高専門性群	17	23.12±4.17	12.82±4.07	14.41±2.60	7.94±1.19
F		0.81	0.93	0.07	4.70
p		n.s.	n.s.	n.s.	*

* $p<.05$

３．尺度間の関連

（１）ストレッサー尺度と対処行動尺度

ストレッサー尺度（４下位尺度）と対処行動尺度（３下位尺度）について下位尺度得点間の Pearson の積率相関係数を求めた（表３）。

ストレッサー尺度と有意な相関が得られた対処行動尺度は「組織風土」と「積極的対処行動」（r=-.314, p<.01 ）、「評価懸念」と「積極的対処行動」（r=-.293 , p<.01）、「評価懸念」

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

と「逃避的対処行動」（r=.258,p<.05）であった。その他の下位尺度得点間に有意な相関はみられなかった。

表３　ストレッサー尺度と対処行動尺度得点との相関

尺度名	下位尺度	ストレッサー尺度			
		役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
対処行動尺度	積極的対処行動	-0.052	-0.93	-0.314**	-0.293**
	適応的対処行動	0.009	-0.096	-0.166	-0.189
	逃避的対処行動	0.114	0.133	-0.085	0.258*

*p<.05　**p<.01

また、男女別のストレッサー尺度とコーピング尺度との相関を表４（男性）、表５（女性）に示す。

男性において、ストレッサー尺度と有意な相関が得られたコーピング尺度は「組織風土」と「積極的対処行動」（r=-.491, p<.01）、「評価懸念」と「適応的対処行動」（r=-.511, p<.01）であった。

女性において、ストレッサー尺度と有意な相関が得られたコーピング尺度は「組織風土」と「積極的対処行動」（r=-.265, p<.05）、「評価懸念」と「積極的対処行動」（r=-.295, p<.05）、「評価懸念」と「逃避的対処行動」（r=.278, p<.05）であった。

表４　ストレッサー尺度とコーピング尺度との相関（男性）

尺度名	下位尺度	ストレッサー尺度			
		役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
対処行動尺度	積極的対処行動	-0.002	-0.242	-0.491**	-0.358
	適応的対処行動	-0.242	-0.149	-0.254	-0.511**
	逃避的対処行動	0.167	-0.244	-0.109	0.246

**p<.01

表５　ストレッサー尺度とコーピング尺度との相関（女性）

尺度名	下位尺度	ストレッサー尺度			
		役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
対処行動尺度	積極的対処行動	-0.106	-0.026	-0.265*	-0.295*
	適応的対処行動	0.165	-0.055	-0.181	-0.007
	逃避的対処行動	0.082	0.232	-0.061	0.278*

*p<.05

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

（２）ストレッサー尺度と GHQ（精神健康度）

ストレッサー尺度（４下位尺度）と GHQ（精神健康度）について尺度得点間の Pearson

の積率相関係数を求めた（表６）。

GHQ と有意な相関が得られたストレッサー尺度は「役割葛藤」（r=.438, p<.01）、「同僚との関係」（r=.357, p<.01）、「組織風土」（r=.422, p<.01）、「評価懸念」（r=.480, p<.01）であった。

表６　ストレッサー尺度と GHQ 得点との相関

尺度名		ストレッサー尺度			
	下位尺度	役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
GHQ		0.438**	0.357**	0.422**	0.480**

**p<.01

また、男女別のストレッサー尺度と GHQ との相関を表７（男性）、表８（女性）に示す。

男性において、GHQ と有意な相関が得られたストレッサー尺度は「役割葛藤」（r=.595, p<.01）、「組織風土」（r=.425, p<.05）、「評価懸念」（r=.657, p<.01）であった。

女性において、GHQ と有意な相関が得られたストレッサー尺度は「役割葛藤」（r=.363, p<.01）、「同僚との関係」（r=.395, p<.01）、「組織風土」（r=.464, p<.01）、「評価懸念」（r=.402, p<.01）であった。

表７　ストレッサー尺度と GHQ 得点との相関（男性）

尺度名		ストレッサー尺度			
	下位尺度	役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
GHQ		0.595**	0.334	0.425*	0.657**

*p<.05　**p<.01

表８　ストレッサー尺度と GHQ 得点との相関（女性）

尺度名		ストレッサー尺度			
	下位尺度	役割葛藤	同僚との関係	組織風土	評価懸念
GHQ		0.363**	0.395**	0.464**	0.402**

**p<.01

４．因果関係の検討

（１）GHQ（精神健康度）を従属変数とした重回帰分析

「ストレッサー」が GHQ（精神健康度）に与える影響を検討するために、重回帰分析を行った。結果を表９に示す。また、重回帰分析に基づくパス図を図１に示す。

ステップワイズ法で重回帰分析を行った結果、調整済み R^2 値は 0.358 となり、一定程度の説明力を有するモデルであることが示された。ベータ（β）値の絶対値が大きい方が GHQ への影響力が高いとされており、評価懸念（β＝0.320）が最も高く、次に役割葛藤（β＝0.279）、組織風土（β＝0.245）となった。

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

表９　重回帰分析結果（標準化係数（β））

	標準化係数（β）	t 値	有意確率
評価懸念	0.320	3.56	0.00**
役割葛藤	0.279	3.15	0.00**
組織風土	0.245	2.75	0.01**

従属変数：GHQ　　** p<.01

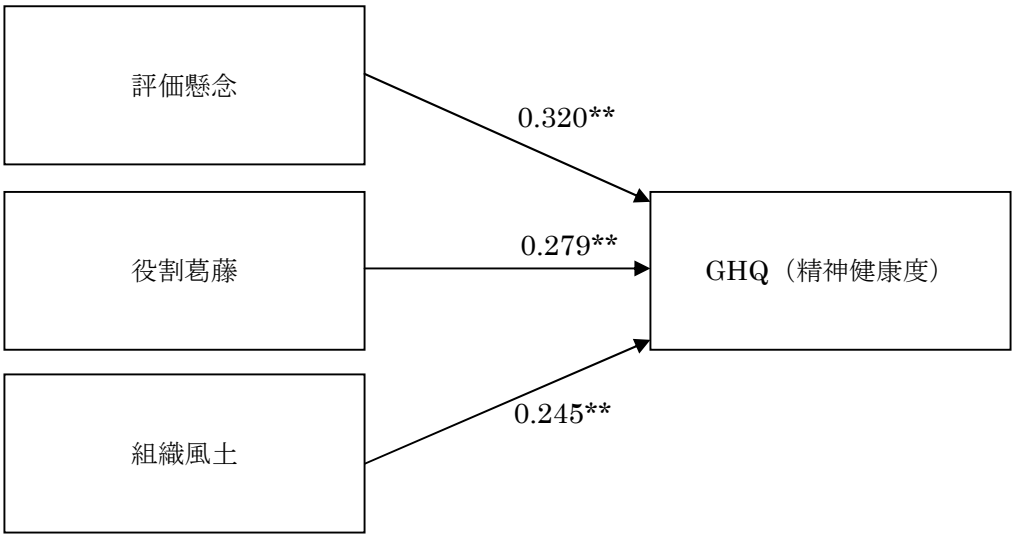

図１　重回帰分析結果（パス図）

Ⅳ. 考察

１．ストレッサー尺度

通算教員経験年数の３つのグループ「若手教員群」「中堅教員群」「ベテラン教員群」において、今回のデータからは有意な得点差は認められなかった。このことから、教員としての経験年数の差はストレッサーを規定する重要な因子とはならないことが示された。

「教師としての専門性」「特別支援教育教師としての専門性」の３つのグループ「低専門性群」「中専門性群」「高専門性群」とストレッサー尺度の関連において、有意な得点差が認められ、専門性が低いと感じている教員は、専門性が高いと感じている教員よりも他人からの評価を意識し、自身のストレスへと繋がっていることを示している。

特別支援教育の学校現場では一つの教室に複数の教員が集まった授業構成が多々あり、教員同士で接する機会が多い。そのため、専門性の身についていないと感じている教員にとって、他の教員からの視線が絶えず続くといった環境は、メンタルヘルスへ大きな影響を与えているといえる。

また、評価懸念に関して教員評価システムも影響を与えているのではないかと考えられる。「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について（答申）」（中央

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

教育審議会，2003）の中で教員の資質能力の向上が教育上の最重要課題とされており、教職員評価、優秀な教職員の表彰制度、指導力不足等教員への対応など、新たなシステム構築を模索し、試行あるいは実施する先行自治体が増加している。沖縄県では平成 18 年度より全教職員を対象に行われている。教職員評価は自己申告と業績評価の 2 つの柱からなり、目標管理や管理職との面談及び自己評価を含めた自己申告を取り入れることにより、評価が一方的ではなく、評価者・被評価者の双方間での仕組みとなっている。年に 3 回（当初・中間・最終）、校長・教頭又は事務長との面談を通じて自己目標を設定し、進捗状況・達成状況について自己評価を行う。その後、教職員の職務遂行の実績やその過程や努力等を評価し、今後の資質能力の向上に役立てている。自身の専門性に自信を持てていない教員にとって、こうした教員評価システムは大きなストレス要因となっているのではないかと考えられる。

２．尺度間の関連

ストレッサーと対処行動の相関を見ると、ストレッサー尺度の組織風土と対処行動尺度の積極的対処行動に負の相関がみられた。これは、積極的対処行動をとればとるほど学校という組織が働きやすい環境となることを示している。

男性では、適応的対処行動をとればとるほど自分自身の評価に対する懸念が低くなるということが明らかとなった。女性では、積極的対処行動をとればとるほど評価の懸念が低くなり、逃避的対処行動をとることで評価懸念へと陥りやすいことが示された。

ストレッサーと GHQ（精神健康度）の相関を見ると、ストレッサーのすべての下位尺度と GHQ に正の相関がみられた。これは、役割葛藤、評価懸念が高いほど、また同僚との関係、組織風土が悪ければ悪いほど精神健康状態が悪いことを示すものである。

男女別の相関を見てみると、男性において役割葛藤、組織風土、評価懸念が GHQ と正の相関が見られ、女性においては役割葛藤、同僚との関係、組織風土、評価懸念が GHQ と正の相関がみられた。このことから、女性は男性よりも同僚との関係が精神健康状態に影響を与えていることが明らかとなった。

３．因果関係の検討

重回帰分析の結果より、教師のメンタルヘルスに影響を及ぼすのは順に、「評価懸念」「役割葛藤」「組織風土」であるというモデルが構築された。「同僚との関係」は GHQ に影響を与えていなかったが、これには複数教員での指導を意味するチーム・ティーチングが影響していると考えられる。チーム・ティーチングで授業を行うことで、教員同士が互いにサポートし合うことのできる環境となっていると考えられる。

「評価懸念」は GHQ に正の効果を示した。このことから、上司や同僚、保護者等からの評価を気にすればするほどメンタルヘルスが悪化していくといえる。特別支援学校では通常学校に比べ保護者との連携の機会が多く、評価懸念へつながっていると考えられる。また、高木・淵上・田中（2008）も、学校評価と教師評価は 2007 年度より全校実施が始まり、具体的な教師評価とそれに連動した能力開発のための手続きや評価方法の確立自体が途上にあり、現在の学校現場にとって多忙や職務上のストレッサーの増加につながっているようであると述べている。こうした要因がメンタルヘルスへ影響を与えていたと考えられる。

「役割葛藤」も GHQ に正の効果を示した。このことから、自身の職務や役割を果たすこ

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

とに対する不安が高ければ高いほど、メンタルヘルスに悪影響を与えるということが示された。他の同僚と仕事の調整や分担が適正に行われることで、自身の能力や適性に合った仕事に集中し、達成感や満足感が得られる機会によってメンタルヘルスが改善されるといえる。

「組織風土」についても GHQ に正の効果を示した。このことから、学校として働きやすい組織を作るために、校長や教頭、学部主事等の管理職が各教師の能力や適性を把握し業務の分担を行い、的確な指導や助言を行うことが必要とされる。

「同僚との関係」は GHQ に影響を与えていなかったが、これには複数教員での指導を意味するチーム・ティーチングが影響していると考えられる。チーム・ティーチングで授業を行うことで、教員同士が互いにサポートし合うことのできる環境となっていると考えられる。職場内での人間関係によってメンタルヘルスは影響され、上司や同僚、保護等との関係の構築は特別支援教育に携わる教師にとって重要な課題となっている。

付記

本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C)「特別支援教育にかかわる教員の専門性とメンタルヘルスとの関連に関する実証的研究（研究代表者；田中敦士　課題番号 21531032)」の助成を受けて行った。調査に協力くださいました学校教員の方々および情報提供を頂きました研究協力者の皆様方に感謝いたします。

文献

1) 赤岡玲子　谷口明子(2009)　教師の対人ストレスに関する基礎的研究　教育実践学研究 ： 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要，　14, 159-166.
2) 中央教育審議会(2003)　新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について（答申）
3) 福岡欣治(2001)　松井豊・編　心理測定尺度集Ⅲ　サイエンス社
4) 橋本剛(1997)　大学生における対人ストレスイベント分類の試み　社会心理学研究 13，64-75.
5) Holmes&Rahe(1967) The Social Readjustment Rating Scale，Journal of Psychosomatic Research，11，213-218.
6) 今田里佳・上村恵津子(2001)　教師のメンタルヘルスを規定する要因の探索的研究 信州大学教育学部紀要，104，245-208.
7) 石川正典・中野明徳(2001)　教師のストレスとサポート体制に関する研究　福島大学教育実践研究紀要第，40，17-24.
8) 久保真人・田尾雅夫(1994)　看護婦におけるバーンアウトーストレスとバーンアウトとの関係ー　実験社会心理学研究，34，33-43.
9) 教職員の勤務の実態や意識に関する分析委員会(2008)　教職員の勤務の実態や意識に関する調査報告書
10) 牧昌見(1999)　学校経営診断マニュアル　教育開発研究所

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

11) Maslach C, Jackson S(1981) The measurement of experienced burnout, Journal of Occupational Behavior, 2, 99-113.
12) 文部科学省(2010) 平成 21 度教育職員に係る懲戒処分等の状況について
13) 中川泰彬・大坊郁夫(1985) 日本版 GHQ 精神健康調査票〈手引き〉日本文化科学社
14) 落合美貴子(2003) 教師バーンアウト研究の展望 教育心理学研究, 51, 351-363.
15) 岡安 孝弘 , 片柳 弘司 , 嶋田 洋徳 , 久保 義郎 , 坂野 雄二(1993) 心理社会的ストレス研究におけるストレス反応の測定 早稲田大学人間科学研究, 6(1), 125-134.
16) 尾関友佳子(1993) 大学生用ストレス自己評価尺度の改定 : トランスアクショナルな分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
17) 坂田成輝(1989) 心理的ストレスに関する研究 : コーピング尺度（SCS）の作成の試み 早稲田大学教育学部学術研究, 38, 61-72.
18) 清水貞夫(2003) 障害児教育教師の専門性 障害者問題研究, 31(3), 178-188.
19) 鈴木邦治 ・別惣淳二・岡東壽隆(1994) 学校経営と養護教諭の職務（II）−養護教諭の役割と「位置」の認知を中心にして−, 43, 153-164.
20) 田上不二夫・山本淳子・田中輝美(2004) 教師のメンタルヘルスに関する研究とその課題 教育心理学年報, 43, 135-144.
21) 高木亮・淵上克義・田中宏二(2008) 教師の職務葛藤とキャリア適応力が教師のストレス反応に与える影響の検討 - 年代ごとの影響の比較を中心に - 教育心理学研究, 56, 230-242.
22) 高木亮・田中宏二(2003) 教師の職業ストレッサーに関する研究—教師の職業ストレッサーとバーンアウトの関係を中心にー 学術研究教育心理学編, 47, 57-72.
23) 田尾雅夫(1989) バーンアウトーヒューマン・サービス従事者における組織ストレスー 社会心理学研究, 4(2), 91-97.
24) UNESCO(1966) Recommendation Concerning the Status of Teachers ILO/UNESCO

Received
January 14,2012

Accepted
March 13,2012

Published
April 30,2012

Asian Journal of Human Services
VOL.2 April 2012

CONTENTS

REVIEW ARTICLE

A Paradigm Shift in Rehabilitation Medicine:
From "Adding Life to Years" to "Adding Life to Years and Years to Life"..... Masahiro KOHZUKI, et al. • 1

ORIGINAL ARTICLES

Compatibility of Market and Publicness in Community Service
Innovation Programs of South Korea ..... Gi-Yong YANG • 8

Relation between sports activity experience and individual
attributes of students with intellectual disabilities in
high-school special needs education programs ..... Hideyuki OKUZUMI, et al. • 21

A Study on the Relationship between the Community
Organizing Movement and the Emergence of Social Enterprise in Korea
-Focused on Relationship with Self-Sufficiency Project- ..... Moon-Kuk LEE • 29

Attitudes toward suicide survivors, perspectives on suicide
and death among Japanese university students ..... Akira YAMANAKA • 38

Development Process and the Actual Situation of Social Business in Japan ..... Hong-Gi KIM • 51

Psychological Effects of a program combining exercise with group work:
Toward to the development of an effective program for patients with diabetes mellitus..... Kyoko TAGAMI, et al. • 67

A Evaluative Research of the Effectiveness of the Voluntary Elder Ombudsman..... Jung-Don KWON, et al. • 81

The Characteristics of Children with Physical Disablities and the Curriculum
and Teaching Method for Them in the Special Needs Education..... Chang-Wan HAN, et al. • 94

Categorization of Consumption Expenditure and Analysis of the Factors
Affecting It- For Households with Elderly Members who Participated in
an Employment Promotion Project for the Elderly in 2011 - ..... Gi-Min LEE, et al. • 116

Relationship between Stress-appraisals and Depression among the
Institutionalized Elderly in Korea ..... Jae-Jong BYUN • 136

Relationship between Teacher Mental Health that Involved in Special
Needs Education and Stressor
- From the Analysis of Mental Health Check for Teachers - ..... Kohei MORI, et al. • 144

The current situation of schoolchildren that seems developmental
disorders in general education. ..... Aiko KOHARA, et al. • 156

SHORT PAPERS

Implications of Community-Based Human Service Program of South
Korea in the Process of Establishing Health Support System
for the Weak People for Disasters ..... Keiko KITAGAWA, et al. • 166

A study on the development and the issue of the small-scale sheltered
workshop for the persons with disabilities in Taiwan ..... Chen Liting, et al. • 176

A comparative study on Quota System in Japanese and Korea..... Moon-Jung KIM, et al. • 193

Published by
Asian Society of Human Services
8-24-25 Shinmachi, Ome, Tokyo, Japan